

新刊紹介

梵漢對譯佛敎辭典 (翻譯名義大集)

萩原雲來 著

丙午社出版(定價拾圓)

著者の苦心によりて梵漢對譯佛敎辭典が刊行されたのは大正四年三月であつて、之を前後して京都大學敎授楠博士の翻譯名義大集の本文が完成出版せられ我國に於ける二大佛敎辭典として、佛敎研究者に一大光明を興ふることをなつたのである。

然るに著者の梵漢對譯佛敎辭典は其の後久しく絶版となり、佛敎研究者で之を座右にそなへんと望むものもあつたが、皆其の望を遂げることが出来なかつたが幸ひ、本年二月著者は新たに誤植を訂正し、名目の番號のローマ數字をアラビア數字に改め、面目を一新して改版せられたのである。

改版せられてから第一に目につくのは裝幀の綺麗になつたことと、一より二八四までの名目番號及び索引の見出し番號がことごとくローマ數字を改めてアラビア數字にしてあることと二つである。以前ローマ數字で索引から探り出してゐた時には慣れぬローマ數字であるため随分探出しにくかつたが改版以後は索引から字句を探し出すのに大變楽になつた氣がする。

翻譯名義大集とは著者も序文にいはれる通り「大字源」の意味で

あつて、主として佛敎經典中に出づる成句や名目を抄出類聚したものである。現在の形は梵語、西藏語、漢語、蒙古語の四種對照であつて、西藏の學者等が西紀九世紀に梵語とその西藏語譯を載せたに初まり、後、漢語と蒙古語を附加したものだといふのは泰西學者の意見である。

西紀第九世紀には印度より西藏へ佛敎が輸入せられて次第に隆昌に赴いた時代であつて、多くの經典が翻譯せられたのである。然るに含蓄多き印度の雅語を西藏語に翻譯するには、随分言語の混雜を生じたであらう。そこで梵語の重要な言葉に對する西藏語の譯語を一定しておく必要があつたので、九世紀頃印度方面から入藏せる三藏が佛敎の語類を諸佛典より拔萃し同世紀の中に西藏の梵語學者によつて西藏語を附加せられた。そこで此の書の西藏語譯は永く梵語經典を西藏語譯する際の規準となつたのである。而して蒙古語と漢語とはいづれの時代の附加か判らぬけれども、おそらく唐宋に降る時代であらうしく、その漢語の中には佛敎經典所出の譯語に見られぬものもある。のみならず其の譯語も或は西藏語より或は梵語より譯せられ決して一定してゐない。

素と翻譯名義大集は、いま云つた様に四語對照になつてゐるが著者の佛敎辭典(翻譯名義大集)は梵漢對譯となつて居る。蓋し我國の佛敎研究者は多く梵漢を對照すること比較的多く梵語經典閱讀の際に梵語に對する適當なる譯語を考へ出せ無き時に、それ相當の譯語をば、佛敎辭典で檢出する時は非常に便利であるからその爲梵漢對譯の佛敎辭典が作られたのである。

此の書を披くものは先づ序文を讀まねばならない。此の書の背

後には幾多の歐洲の佛敎學者言語學者及び著者が心血を注いで此の書の完成に努力して居ることを知つたならば、一語々々が苦心の結晶であることがわかるであらう。

けれども歐洲に於ても之はフーコー、シュリアン兩氏がヘテルスブルグ大學所藏の同書の謄本から手寫したものであるから誤謬無きを得ない。著者は本文中明かに誤謬と思はれる語には (om.) の記號を附して見るものに注意を與へ、寫本である爲めに書體の混同より意義の變動を來してゐるものもあるから其の際には訂正して正しい語を知らしめ、前述の通り漢語は比較的後世の附加であるから梵語の譯語として妥當を缺く場合もあるから、著者は漢譯經典中より適當な譯語を措擧して相當欄に挿入して居られるから之によりて該梵語に近い經典中の漢譯語をも見出すことも出来る。

本文は二百五十四頁、注記は曖昧な又不正確な語句名目に對する著者の見解を述べたもので六十頁、それに改版は二頁注記が追加されてゐる。索引には梵語索引、漢語索引、法數索引があつていづれの方面からでも語句を引出すに便利になつて居る。佛敎研究者佛敎梵語研究者の是非座右に備ふべき辭典である。(甲斐實行)

寄贈雜誌

學苑 本年八月號 昭和二年七月—八月

東亞之光	生理學研究	佛敎研究	人間高昇	哲學雜誌	神學評論	學校敎育	頌悲	丁酉倫理講演集	觀想	哲學評論	信濃敎育
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
七月號	八月號	七月號	八月號	七月號	第十四卷第三號	八月號	八月號	八月號	七月號	第一卷第一號、第二號	八月號